



駐日ポーランド共和国大使館



ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO



2020 年 7 月 22 日

駐日ポーランド共和国大使館、ポーランド広報文化センター

ニュースリリース

日本赤十字社に救済された

在シベリアポーランド児童の日本到着 100 周年

2020 年 7 月 22 日は、日本赤十字社に救済されたシベリアのポーランド人児童第一団の日本到着から 100 年目にあたります。



日本赤十字社所蔵

在シベリア ポーランド児童（その大半は孤児でした）は、政治的流刑者と戦争避難民の子孫でした。ボルシェビキ革命の結果、彼らはとりわけ困難な状況に置られました。彼らに援助の手を差し伸べたのは、1919 年 9 月にすでにポーランド救済委員会を設立していた、ウラジオストク在住のポーランド人たちでした。ポーランド委員会代表に就任したの

はアンナ・ビェルキェヴィチ、副代表は著名な医師・社会活動家のユゼフ・ヤクプキェヴィチです。

アンナ・ビェルキェヴィチは渡辺理恵駐ウラジオストク日本領事の支援を取り付けた後、東京に赴き、そこで田中義一陸軍大臣と加藤友三郎海軍大臣の支援を得ました。同時に、在シベリア ポーランド人児童帰国案件を担当したのが日本国外務省であり、案件の調査を日本赤十字社に指令しました。本案件には皇室も関心を示し、この事業のために、皇后宮職三條主事を派遣しました。

1920 年 7 月 22 日、ポーランド人児童の第一団が敦賀港に日本に到着し、1921 年 7 月までに 375 名の児童と 32 名の付添者が到着しました。移送船はいずれも敦賀港に来航し、そこから東京にある仏教系福祉団体福田会の育児院に運ばれました。

児童が受けた歓迎は手厚く、現地新聞は連日、新聞紙面に彼らの滞在についてのニュースを載せました。ポーランド人児童の到着は日本世論の大関心を引き起こし、大勢の個人寄付者のおかげで、児童たちに素晴らしい生活が保証されました。福田会施設に滞在中、児童たちはとても良好な生活環境に恵まれ、彼らのために学業・遠足・文化行事が企画されました。

アンナ・ビェルキェヴィチは回想しています——「日本において、私たちの仕事は、素晴らしいおとぎ話のような思い出を残しました。子どもたちが日本国民から繊細な善行をどれほど受けたかを言葉で表すことはできないでしょう」

日本にやってきた子どもたちの多数は、重い病にかかっていた。困っている子どもはみな、日本赤十字病院に保護されました。病院職員はポーランド人児童の世話に尽力し、病んだ子どもたちから感染して腸チフスで亡くなった松沢フミ看護師は人道的行動の象徴になりました。

近年になって、日本赤十字社職員が記した児童滞在の日録が発見されました。現在その調査が行われ、日本語の口語に翻刻されています（この作業を指示したのは、福田会です）

1921 年 4 月 6 日、「皇后陛下（貞明皇后）がシベリアから来たポーランド人児童をご訪問になられた」と A・ビェルキェヴィチが書いています。それから間もなく、日本赤十字社は顕彰の印として、A・ビェルキェヴィチを名誉会員に加えました。

このころ、同様の使命を帯びてアメリカ合衆国に向かったのがユゼフ・ヤクプキェヴィチで、彼は児童（総数 369 名）の移送に対する国務省の許可を取り付け、彼らはシアトル到着後、ポーランド系アメリカ人の孤児院に入り、1922 年にポーランドに戻りました。

この帰国事業が大成功を収め、また日本人がアンナ・ビェルキェヴィチの事業を評価したため、日本赤十字社は引き続きシベリアの児童救済活動を決断し、彼らは 1922 年 8 月に日本で保護され、この第 2 回目の事業によって、計 388 名の子どもが保護されました。日本の寄宿舍に数日滞在した後、1922 年 8 月に子どもたちは付添者とともに、日本からロンドンに出港し、そこからポーランドを目指しました。

2002 年には、当時の天皇皇后両陛下（現上皇皇后陛下）は、ポーランドご訪問中に、最後の存命シベリア児童と面会されました。これらの方々は高齢にもかかわらず、大きな感謝の念とともに、桜咲く国・日本での滞在を回想し、当時覚えた日本の歌をまだ記憶していました。

ポーランドとポーランド国民は、連帯・人道主義・友情あふれる、この活動をけっして忘れないでしょう。日本の援助によって、子どもたちは、無事ポーランドに戻るようにとの家族の願いを果たしました。彼らにとって、シベリアから日本とアメリカ合衆国を経由するという、長い道のりでしたが、無事先祖の国である母国にたどりつきました。

本年、東京の福田会で、写真パネル（100 年前に福田会で撮影された、シベリアからのポーランド人児童の写真を陶器に焼いたもの）を、敦賀・人道の港ムゼウムとクラクフの日本美術技術博物館〔マンガ〕に寄贈する式典が予定されています。

シベリアからのポーランド人児童日本到着 100 周年公式行事は、本年秋に計画されていましたが、新型コロナウイルス蔓延により、2021 年に延期されました——9 月にワルシャワで、11 月に東京で開かれます。

文：ポーランド広報文化センター

SNS キャンペーン「シベリアから来た児童の子孫を探しています」：
<https://www.youtube.com/watch?v=WQIA-2JhxGk&feature=youtu.be>

付：ポーランド広報文化センターが社会福祉法人福田会と共同で作成したコミック
（絵 ラファウ・ゴシェニゼツキ）

駐日ポーランド共和国大使館

<https://www.gov.pl/web/japonia/ambasada>

tokio.amb.sekretariat@msz.gov.pl

Twitter: @PLinTokyo

Facebook: Ambasada RP w Tokio

ポーランド広報文化センター

<https://instytutpolski.pl/tokyo>

tokio@instytutpolski.org

Twitter: @PLinst_Tokyo

Facebook: Instytut Polski Tokio

シベリアのポーランド孤児——日本滞在100周年

第一次世界大戦後の1918年、123年に及ぶ三国分割を経て、ポーランドは宿願の独立を回復し、ヨーロッパ地図に帰ってきました。

このころ、広大無辺のシベリア地域に、三国分割時代に流刑されたポーランド人政治犯の子孫たちがいました。ボルシェビキ革命と内戦は、彼らの基本的な生活資金と住み家を奪いました。とりわけ過酷な状況に置かれていたのは子どもたちです。

子どもたちを集め、祖国に帰還させる事業に携わったのが、1919年にウラジオストクで結成されたポーランド救済委員会です。アンナ・ビェルキエヴィチは、その委員長に就任しました。

委員会は多くの国の援助を求めました——日本もそのひとつです。1920年6月に、アンナ・ビェルキエヴィチは東京の外務省に赴き、外務省は、日本赤十字社に事案の調査を指示しました。帰還事業の大きな人道的意義を考慮した赤十字社は、援助を行うことに同意しました。

子どもたちの第一団が海路ウラジオストクから敦賀に上陸したのは、1920年7月22日です。1921年7月までに、375名が東京に到着しました。1922年の7月と8月には、続く388名が、大阪に到着しました。

東京滞在中の子どもたちを、多くの善意と大きな熱意を込めて保護したのが、東京の社会福祉法人・福田会です。子どもたちが福田会に暮らしていた間に、（大正天皇の）貞明皇后がご訪問になりました。

2002年に天皇后両陛下（現上皇上皇后両陛下）がワルシャワを訪問された際、3人の元シベリア孤児とご面会になりました。彼らは、桜咲く国・日本の思い出を感動をこめて語りました。



駐日ポーランド共和国大使館



ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO